

私は、心の諸科学の基本概念と方法論、その倫理的  
問題について考察する科学哲学を第一の専門としてお  
ります。心理学史もこの分野の重要なアプローチ方法  
で、本誌の「心理学史 諸国探訪」は、科学的活動が  
文化や歴史から切り離せないことに気付かせてくれま  
すので、いつも楽しみに読んでいます。

これまで、私は心身関係や身体論についての研究を  
軸に据え、心理学者の方たちと共同研究してきました。  
自分の研究スタンスを、J・ギブソンの生態心理学と、  
メルロ＝ポンティの現象学を総合した立場として「生態  
学的現象学」と名付けています。

現在は、「顔身体学」という、心理学、文化人類学、  
スポーツ学、哲学などの分野を  
横断する新しい領域の構築と  
発展に取り組んでいます。対  
人関係に目を向けると、身体  
の中でも顔のもつ表現力は突出  
しています。『心理学ワールド』  
では、89号（2020年）「顔」と  
90号（同年）「人を区別する」  
に関連するテーマが扱われて  
います。90号では私の共同研  
究者である山口真美氏や田中  
彰吾氏が寄稿していますが、哲  
学では決して扱われることの  
ない「顔の左右の表現の違い」  
（大久保街亜氏）や、「サカナ  
の顔」（堀田崇氏）といった89  
号のテーマも非常に興味深いのです。フランスのユダ  
ヤ系哲学者であるE・レヴィナスは、人間の顔に倫理的  
行為の根拠を求めました。しかし、動物や魚類、昆虫な  
ど顔をもつ生物はたくさんいます。また、その顔なるも  
のに変工を加える入れ墨や美容整形、化粧行動（「顔  
の化粧」木戸彩恵氏）は、どう理解すればいいのでしょ  
うか。こうしたことを考えた時には、レヴィナスの倫理  
学は、古典的な男性ジェンダーに偏った立場であるかの  
ようにも思えてきます。

倫理学は、道徳性について考察する哲学の一分野  
ですが、心理学と倫理学は興味深い関係にあります。  
倫理学は、「どうあるべきか」という規範性に関わり、  
心理学は「どうあるのか」という事実性に関わると言  
われます。倫理学では、規範性を事実性から峻別しよ

うとする反自然主義と、その両者が明確な線引きがで  
きないと考える自然主義の間で議論が続いてきました。  
私は、「どうあるべきか」を、現状が「どうあるのか」か  
ら切り離して人々に要求することは、それ自体が倫理  
的問題を孕んでいると考えています。少なくとも、実  
際の私たち人間の行動を視野に入れなければ、実践的  
な規範を立ち上げられないと思います。

こうした観点からは、98号（2022年）の「『正しさ』  
を考える」は興味深い企画でした。公正性に関わる義  
憤と自己利益が関与する私憤との関係をめぐる上原俊  
介氏の議論は、哲学において、正義を感情に基づく  
と考える「道徳感情論」（現代の代表格は、M・C・ヌスバ  
ウム）と正義は感情に基づくべ  
きではないと考えるカント的な  
「義務論」の対立に新しい観  
点をもたらしてくれます。感情  
のない人工知能は、正しい道  
徳的判断をもたらすのでしょ  
うか。それ以前に、AIの判断は  
そもそも道徳的判断と呼べる  
のでしょうか。この点について  
谷辺哲史氏は鋭く問題提起し  
ています。また、笹原和俊氏  
が論じているように、SNSなど  
で伝達される「情報」には、哲  
学の古典的な「真偽」の区別  
が当てはまらない面が含まれ  
ています。これまでの倫理学は、

テクノロジーの発展を度外視してきましたが、心理学は  
こうした前提を問い直しています。

あるいは、動物をどのような道徳的配慮の対象にす  
べきかという動物倫理も、人間と動物の絆についての  
文化的・歴史的な関係を抜きにしては語れません。こ  
の点で、92号（2021年）の「動物との絆」について  
の特集は非常に重要なものでした。権利や義務につ  
いての抽象的な言葉に満ちた倫理学を、人間的行動の有  
する事実性に根付かせて論じていくには、心理学から  
のたくさんの助けが必要であると、私は考えています。

## 哲学の領域から

立教大学文学部 教授  
河野哲也



こうのてつや 専門は哲学（現象学、心の哲学、  
理論心理学）、倫理学。博士（哲学）。『コロナ  
時代の身体コミュニケーション』（共編著、勁草  
書房）など。